



## 2020年度「共通テスト」導入見据え多様化する大学入試

これまで120万人で安定していた18歳人口が、いよいよ減少を始める。2020年度からは、これまでの大学入試センター試験に代わり、「大学入学共通テスト」(仮称)が導入されるなど、大学入試は激動期を迎える。その中で来春の入試はどうなるのか。【中根正義】

### 学部新增設の動き続く

大学の新增設や学部増設が止まらない。来春は公立2校、私立3校の計5校が新設される。

公立小松大(石川県小松市)は生産システム科学、保健医療、国際文化交流の3学部、長野県立大はグローバルマネジメント、健康発達の2学部でスタートする。私立大では育英大(群馬県高崎市)、通信制の東京通信大、新潟市の新潟食料農業大の3校が開学する。新設ではないが、堺市にあるプール学院大は桃山学院大などを運営する学校法人桃山学院の下で、桃山学院教育大(教育学部)に名称変更し、長野県諏訪市の諏訪東京理科大は公立大に生まれ変わる。

学部増設・改組では医療系が目立つ。国際医療福祉大は東京都港区に赤坂心理・医療福祉マネジメント学部を新設、「こころのケア」や「医療福祉・経営管理」の専門職人材の育成を目指す。駒沢女子大看護学部など看護系の新設も多い。

このほか、東北学院大文学部に教育学科、東海大は文化社会学部と健康学部、東京農業大は農学部で生物資源開発学科とデザイン農学科、京都産業大は情報理工学部、立命館大は食マネジメント学部をそれぞれ新設。金沢工業大は環境・建築学部を建築学部と工学部に再編する。

国公立大も学部の改組・新設に力が入る。九州大には文理融合系の共創学部、広島大に情報科学部、富山大に都市デザイン学部ができる。公立大では横浜市立大がデータサイエンス学部、名古屋市立大が総合生命理学部と、10以上の国公立大で学部改革が行われ、理系分野や情報系、文理融合系学部の新設が目立つ。

### 定員増の私大に注目

今年の私立大の一般入試は厳しいものとなった。志願者が約8%と大幅に増えたことに加え、大手有名大を中心に合格者を絞ったためだ。これは、文部科学省による私立大の入学定員厳格化の影響が大きい。

これまでは、大学全体の定員が8000人以上の大規模校の場合、定員の1.2倍以上、それ以外の大学は1.3倍以上を入学させると補助金が打ち切られた。昨年から定員4000人以上8000人未満という中規模校の区分を新たに設け、段階的に入学定員超過を厳しくしている。

来春は大規模校は1.1倍、中規模校1.2倍(小規模校は1.3倍に据え置き)にする。さらに、19年度入試からは定員と入学者が同数となる1.0倍に絞られる。

今年の入試が厳しくなったのは、定員厳格化を踏まえ、合格者を減らす大学が続出したからだ。来年はさらに減らすとみられるだけに、私立大入試は激戦が予想される。大学通信情報調査部の井沢秀部長は「今年の入試は中堅私立大の文系学部で志願者が増えた。定員厳格化を見越して受験生が併願校を増やしたからだ。それでも今年は浪人が増えた。来春は、さらに合格者が絞り込まれる。そのことを踏まえて併願作戦を立てたい」とアドバイスする。

ところで、来年も入学定員を増やす大学がある。表の通り、明治大や日本大など67校で定員が計6908人増える。学部・学科の新設や、既存学部の定員を増やすなど、その中身はさまざまだが、定員厳格化の中で、そうした大学には受験生が集まりそうだ。

### 増える「育成型入試」

20年度から現在の大学入試センター試験に代わる大学入学共通テストが実施される。知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力を問う内容が出題される。一定の条件下で記述式問題が出題されるほか、英語の運用能力を問うために4技能(聞く、読む、話す、書く)の能力を測る目的で外部試験を活用した入試の導入が検討されている。

さらに、今後は大学が求める学生像を明示した「アドミッションポリシー」に基づいた選抜が行われることになる。クラブやボランティアなどの活動歴、留学経験や物事に取り組む意欲などを総合的、多面的に評価して入学者を決めようというものだ。

この新しい入試を先取りする形で、AO入試などで多面的、総合的な選抜試験に取り組んでいる大学が増えている。追手門学院大のアサーティブ入試や金沢工業大の目的志向型入試などだ。いずれも複数回の模擬授業や面接などで受験生の学ぶ意欲を喚起しながら、さらに伸ばしていこうというもので、育成型入試と言われる。来春から九州産業大も、この入試を新たに取り入れる。

推薦やAO入試を巡っては、国立大でもその割合を募集定員の3割まで増やすことを国立大学協会で行き決めている。早くから導入している筑波大は、すでに全体の3割を超える約600人、東北大は約500人の募集定員がある。

### ●自分に合った入試、情報収集し戦略を

大学入試センター試験に代わる新テストがスタートするのは21年1月からだが、改革のうねりは現在の入試にも及び、多種多様な入試が行われるようになって

いる。「気になる」と思う大学があれば、早めに情報収集を行いたい。その上で、自分の得意なところを生かせる入試方式で勝負する戦略を立て、厳しい入試戦線を乗り切ろう。

### 就職好転で文系に人気

今年の志願動向について、駿台予備学校が模試データから分析したものが上のグラフだ。就職状況が好転する中で文系学部の人気が高まりつつある。

前年の募集人員を100とした場合、経済・経営・商学系が人気になっている。一方、教員養成・教育系は勤務時間の長さがクローズアップされていることなどから敬遠されている。

理系では、底堅い志願者がいるのが工学系だ。ロボットやAI、ICT関連の機械、インフラ整備の土木・建築など、社会ニーズが高い系統で志願者が多い。

これまで学力上位層の志願者が多かった医学系は人気に陰りがみられる。駿台の石原さんによれば、その理由は二つあるという。一つは学力最上位層に次ぐ層が工学系の就職状況の良さを見て、そちらに流れているという点だ。もう一つは、受験で地元出身者を優遇する地域枠が地方国立大で定着化し、都市部の志願者には狭き門になっていることも敬遠される理由になっている。

毎日新聞 キャンパスNOWから



## 新しいテスト「大学入学共通テスト」

### 2021年1月から実施

センター試験は2019年度(2020年1月)の実施を最後に廃止され、これに代わり2020年度からスタートするのが「大学入学共通テスト」(以降、「共通テスト」)です。これまでのセンター試験と同様、1月中旬の2日間で実施されます。**今の中学3年生(2017年4月時点)から、この「共通テスト」(2021年1月実施)を受検することになります。**

「共通テスト」は、現行の学習指導要領で学んだ生徒が受検する2020~2023年度と、次期学習指導要領で学んだ生徒が受検する2024年度以降で、出題・解答方法などの制度設計が分けて検討されています。導入当初の出題教科・科目は、現行のセンター試験と同様の30科目が予定されていますが、2024年度以降は簡素化する方向で見直されます。

現在のセンター試験からの大きな変更として、これまでのセンター試験になかった記述式問題の導入と、英語について4技能(読む・聞く・話す・書く)を評価することが挙げられます。

また、新テストの導入にあたっては、「知識・技能」だけでなく、大学入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するという考えがベースにあります。現在、そうしたテストとなるよう出題内容について検討が進められています。一般に「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する問題を多く出題すると、テストの難易度は上がる傾向にありますので、現在のセンター試験と比較すると難易度の高い問題の出題が考えられます。

### 国語と数学で記述式問題を出題

現行のセンター試験は全てマークシート方式で実施されていますが、「共通テスト」では一部で記述式問題が導入されます。**当初は国語と数学で実施され、2024年度以降からは地理歴史・公民や理科学分野に広げることが検討されています。**

### 英語は民間試験活用を基本に

英語は実施形態を含めて大きく変わります。民間の資格・検定試験を活用して4技能(読む・聞く・話す・書く)を評価するものになります。

グローバル化が急速に進展するなか、英語のコミュニケーション能力を重視する観点から、大学入学者選抜でも4技能を評価する必要性が示されてきました。現行のセンター試験は「読む」「聞く」の2技能の評価に留まっていたとされ、新テストでは4技能を評価する方向で検討されてきました。しかし、センター試験のような大規模な集団に、同日に一齐に「話す」「書く」に関する試験を実施するのは難しいものがあります。そこで、すでに4技能評価を行っている民間の資格・検定試験を活用することが提示されました。

活用できる民間の資格・検定試験は、現在確定していません。今後、大学入試センターが、試験内容や実施体制など大学入学者選抜として必要な水準・要件を満たしているかを判断し、認定を行う予定です。

受検者は、認定された試験のなかから、高校3年生以降の4月~12月の間の2回までの試験結果を活用します。活用する資格・検定試験出願時に、大学入試センターへの成績を送付することを実施団体に依頼し、その成績とCEFR(\*)に対応した段階別評価が大学入試センターから大学に送付される仕組みです。資格・検定試験の成績の有効期限や、既卒者の対応などは現在未定です。

なお、2023年度までは大学入試センターが実施する共通テストでも英語を実施します。資格・検定試験と共通テストの英語のいずれか、または双方を活用するのは大学の判断に委ねられます。

河合塾 Kei Net より

※CEFR:外国語の学習・教授・評価(Learning, Teaching, Assessment)のための国際指標。